私の青春の１ページは。

峻司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私の青春の１ページは。

【Ｎコード】
Ｎ２７７４Ｆ

【作者名】
峻司

【あらすじ】
私が高校入学と同時に入った部活。３人の先輩がいるその部の活動内容は、他にないものだった。先輩に振り回されながらも、私は日々を過ごして行く！ドタバタラブコメディ！

第1話　私と部長の茶番劇

「なるべく多くの生徒に伝えるにはどうすればいいと思う？」

早朝です。
私は今、部室にいます。朝練の真っ最中です。

「おーい秋菜、聞いてるかー？」

っと言っても我が部は朝練なんてまずありません。
昨日の夜、突然部長から「明日朝練七時半集合！」ってメールが来たんです。
いきなりですよ、コノヤロー。

「おーい……」

ううっ、何でこんな早く出てこなければいけないんでしょうか。
1時間早く来るのがどれだけしんどいか分かっていないのでしょうか。
朝の5分でもかなり貴重なのに、1時間ですよ！？12倍ですよ！？
モーニングタイム返せコノヤロー。

「おい！」

「なんだよコノヤロー」

「何だと？コノヤロウ」

「……いえ！！なんでもございません！！」

しまった……いちおう先輩なんだから気をつけないと……

この茶髪で無造作ヘアの先輩は、二年生の稲葉(いなば)先輩。この部の部長さんです。

以上です。この先輩の紹介はこれぐらいでいいや。

「ったく、ちゃんと聞いとけよ？」

先輩は机に頬杖をつきながらため息をついた。

「あのー、他の先輩の姿が見えないのですが……」

「ああ、あいつらな。２人とも新聞配達のバイトで来れないってよ」

絶対サボりですよね！？てかもうとっくに終わってますよね！？

……私もそうすればよかったなぁ。

そんな私の胸中など知りもせず稲葉先輩が言う。

「本題に戻るぞ。たくさんの生徒に伝えるにはどういう方法があるか」

「えーっと、掲示板にポスター貼るとかどうですか？」

「めんどくさいし面白くないな」

おいこら。

私はにらみを利かせた視線を向けるけど、当然のごとく先輩は気づかない。

ん？まてまて、もっと簡単なやり方があるじゃないですか。

「そうです！放送部に頼んで昼休みに放送してもらうんですよ」

「いやそれは……、まてよ？それだ！！」

稲葉先輩は立ち上がり、不敵な笑みを浮かべて声高らかに宣言した。

「放送室を襲撃するぞ！」

なぜそうなる……。

そして昼休み、空腹でお腹と背中がくっ付きそうな私は部室に呼び出されていた。

「お腹空きましたよぅ……」

「少しぐらい我慢しろ」

「ところで、他の先輩方の姿が……」

「2人なら急にお腹が痛くなったって言って保健室いったぞ。まったく運が悪いやつらだ」

……逃げたんですね？そうですよね？

稲葉先輩はごそごそと黒いバッグから二丁の銃を取り出すと、ゴトリと重く鈍い音を立てて机の上に置いた。その傍には被り物が同じく二つ。

あらー、なんだか本格的になってきましたよ…。

「って、これいったいどこから持ってきたんですか！？」

「4時間目が体育の授業だったからな。いきつけのおもちゃ屋まで走っていって借りてきたんだ。売り物だから傷つけるなよ？」

ごめんなさい。突っ込みどころが多すぎて私には無理です。

だからというか、重要な部分だけを質問。

「これ、危なくないですか？？」

「安心しろ、玉は入ってない。そろそろ時間だから準備しとけ」

そう言うと稲葉先輩は被り物を頭につけ、銃を手にした。私もそれに見習う。

そして普段通り、スピーカーからお昼の音楽が流れてきた。流す曲は放送部の人たちが決めているけれど、今日は最近流行した平和を望む歌詞の曲だった。今から犯罪まがいのことをする私たちには完

全にミスマッチだ。

「よし、行くぞ！」

「はいー」

「ククッ、見てろよ放送部。あの時の恨み今から晴らしにいってやるぜ」

呟く部長。私は稲葉先輩がどうか目的を履き違えないようにと祈るばかりだった。

私は勢いよく放送室の扉を開けて銃を構えた。

「手をあげろー。うごくなー」

部員たちは驚愕の表情で固まったまま私達を見ている。

そりゃあセーラー服に馬の被り物をして銃を構えてたら、ですよねぇ。

「フッ、残念だったな。たった今からここは我々が占拠する！」

隣に立つしろくまの被り物が言った。

青いネクタイの、先輩と同学年の男子が一歩前に出る。

「その声は……稲葉！キサマァ！」

いきなりばれてるしっ……！

部員たちも稲葉先輩を知っているのか固かった表情が緩む。

というのもつかの間、先輩がビービー弾を地面に乱射した。部員たちは悲鳴を上げて、次々に部屋を飛び出していく。

玉入ってるしっ……！

「フハハハッ、我々の勝利だ！」

愉悦に浸る先輩を尻目にためいきをついて、奥へと進む。

「はいはい、さっさと終わらせて昼飯食べますよー」

「わかってるって」

稲葉先輩もだるそうにしながら近づき、流れている音楽のボリュームを下げ、マイクのスイッチを入れた。

そしてまさにテロリストの如く放送を開始した。

『諸君、我々はたった今放送室を占拠したボランティア部だ。お前たちに危害は加えないから安心してくれ。実は頼みがあってこの放送をしている。

二年三組の笹原の家の猫が子どもを産んだ。五匹生まれたんだがあと二匹がどうしても貰い手が見つからないんだ。飼いたいやつは二年三組の笹原か、我がボランティア部まで来てくれ！

色は白と……何色だっけな……そう、茶色のしまだそうだ。
ちなみにめちゃくちゃかわいいぞ！以上だ』

稲葉先輩がマイクのスイッチを切った。ふうっと一息つくと私のほうを見て言った。

「よし、任務完了だ。これで飼い主は見つかる。笹原も貰い手も俺達も喜ぶ。みんなまとめてハッピーエンドだ！」

「稲葉せんぱ～い、猫の色ぐらい覚えておいてくださいよー」

「分かってるって！」

分かってなかったでしょうに……。

それにしても声で分かる。先輩はしろくまの被り物の中で満足げに笑っているのだろう。
しかし先輩は気づいてないのだろうか。この放送を聴いた教職員方が駆けつけてきて、私達はもうすぐバッドエンドとなることに……。

第1話　私と部長の茶番劇（後書き）

いかがでしたでしょうか。あくまでライトに書いていきます。

第2話　部員紹介とわたしのお菓子

午後の授業が終わり、私は部室に来ていた。ＨＲが珍しく早めに終わったためか部室には私一人だった。一息つこうと相談者用のソファーに腰を下ろす。

我がボランティア部は、ここで相談者から話を聞いてそれを解決するっていう変わった部活です。直接相談できない人用にはポストも置いてあるんですよ。

ふう、それにしても誰もいないと暇ですね。お腹も空きましたし、早く来ないとソファーかじっちゃうぞ？

まあ、冗談ですけど。

そんなことを考えていると、コンコンっとドアをノックする音が聞こえた。

誰か相談者が来たのかな？

「はーい、どうぞ！」

私の声に反応して入ってきたのは男子生徒だった。ネクタイの色が青色だから二年生だ。

「こんちわ、俺笹原ってものですけど……あ、君一年生？」

「はい、そうですが」

私のリボンの色で判断したのだろう。というかこの人が猫の飼い主を探して欲しいと依頼してきた笹原さんだ。

「飼い主が見つかったって聞きました。よかったですね！」
「ありがと。でもまさかあんな放送するとは驚いたよ」
彼は少し照れたような顔で、頬をかきながら笑った。
「そうでしたかー」
そうですよねー。
「これ、そのお礼だよ。親が持ってけってうるさいからさ」
そう言って彼は菓子折りを差し出してきた。
「わっ、これって白熊屋のお菓子じゃないですか！」
これメチャ美味しいんですよ！そしてメチャ高いんですよ！
やばい、よだれ出る。
「こんな高いものいいんですか？？」
「まあ、うちの親父の会社が作ってるから」
マジですか。
「そうでしたか、ありがとうございます！」
「おう、こっちこそありがとな。部長の稲葉にも伝えておいてくれよ」

「分かりましたー。またいつでも相談しに来てくださいね！」
お菓子のためにもぜひ……。
「それじゃあ」
ニコッっと笑うと彼は部室を出て行った。
私は菓子折りを机の上に置き、再びソファーに座った。

ガラスのテーブルを中心に向かい合う二つのソファー。完全にオフィス状態です。
しかもここはお茶もでるんですよ。
お茶を飲みながらゆっくりお客さんから依頼内容を聞くっていう感じです。
ただ、実際はなかなか来ないんですよね……お客さん。なので日頃は適当にくつろいで雑談しているわけです。

おっと、部活紹介している間にお菓子の包みが開いちゃいました。
しょうがないですねー。食べてしまいましょう♪
ふたを開けると、そこには私のお菓子たちがきれいに整列していた。
さて、どれから食べてあげようかしら。
「君にきーっめた！」
その中の一つを手に取ると、袋を破りかぶりついた。
「うーん、おいしいぃ～」

甘さと上品さが口の中に広がっていきます。きっと今の私は顔が緩みまくっていることでしょう。でも部室には私一人。ぜんぜんもんだいないです！

と、その時ドアがおもいっきり開けられた。片手で鞄を肩に引っ掛けながら入ってきたのは、部長の稲葉先輩だった。

「おう、あき……な？」

緩んだ顔の私と呆気にとられた顔の部長が向かい合う。あれ？あれ？おはやいですね。

ややあって稲葉先輩が叫んだ。

「あーー！それ笹原の家からだろ！？勝手に食うなよ！よこせ！！」

「い、いあでふよー」

菓子折りを奪おうとする先輩に対して、私はもぐもぐしながらそれを抱え込む。

すると先輩は箱をつかみ強引に引っ張ってきた。私も負けじと引っ張り返す。お互い一歩も譲らない均衡状態。

「はなしてくださいよー！そもそも半分は私のじゃないですか！」

口に入ったのを飲み込んだ私は主張した。

「だから取りあえず俺が預かってだな」

「先輩全部食べる気ですね！？」

「そんなことしないっつーの！」

「信じられませんー！」

そして再び部室のドアが開けられた。入ってきたのは理奈先輩だった。背中まで伸ばした黒髪を束ね、優雅な足取りで入ってきた先輩は、菓子折りを引っ張り合う私達を見て失笑した。

「なにしてるのよ、あなた達」

「理奈せんぱ～～い！！稲葉先輩がわたしのお菓子を！！」

「おまえのじゃねぇだろ！」

「ほどほどにしておきなさいよ……」

理奈先輩は呆れた表情を浮かべたままそう言った。

この部には3人の先輩がいるのですが、そのうちの1人がこの方、2年生の河本理奈（こうもとりな）先輩です。成績は常にトップクラス、さらに学校中誰もが認める美人さんです。そして私がこの部活を続けている理由の９０％を占めている存在です。この一風変わった部活が認められているのも、実は理奈先輩のおかげなんです。
誰にでも親切に接する先輩は後輩にも人気があるんですよ。
ああ、今日も凛々しいです・・・。

理奈先輩がソファーに座ると、またドアが開けられた。
やってきた三人目の先輩、健吾先輩は私たちを見ると微かに笑った。

「……フンッ」

今の鼻ですよね！？鼻で笑いましたね！？

この人は浅井健吾（あざいけんご）先輩。常に冷静で寡黙な先輩です。精悍な顔立ちで、剣道とかやったら絶対似合いそうなんですが、剣道も弓道もまったくやったことないらしいです。家も普通の民家らしくて。

なんて、そうこう言っている間に、そろそろ腕の力が限界なんですが……。

「〜〜〜〜っ！」
「〜〜〜！！」

もはやお互い言葉も出ません。

私は必死に抵抗したが、やはり体力では稲葉先輩に敵わなかった。
最後の力を振り絞るが手を滑らせ箱を放してしまった。

ああ、わたしのお菓子、さようなら――――。

しかし急に放してしまったせいで、箱に詰まっていた私のお菓子たちは空中を飛行し、素晴らしい軌道を描きながら我らのアイドル、コリーのもとへダイブした。

あ、ちなみにコリーというのは、部室で飼っている魚のことです。水槽で飼っているコリ何とかって種類の熱帯魚です。

あ、ちなみにわたしのお菓子たちを包んでる袋って紙なのでしみるんです。
きっと今頃水分を吸収して沈んでいるのでしょう。

というか、見れば分かります。

私のお菓子たちは、水を伴いながら水槽の底面を目指してゆっくりと沈んでいきました。

第3話　残念なお菓子と相談者

水槽に近かったため、跳ね返った水槽の水がかかって立ち尽くす稲葉先輩。

漂い沈むお菓子の無残な姿を見て、これはなんだろうと立ち尽くす私。

ソファに座り、無言でこの光景を見ている理奈先輩と健吾先輩。

暫くの沈黙のあと、この静寂を破ったのは理奈先輩だった。

「残念だったわね……」

その言葉で私は現実に引き戻された。そして稲葉先輩を睨み付けて言った。

「どうしてくれるんですか！！まだ一個しか食べてなかったのにー！」

「しるかよっ。俺なんか一つも食べてないって！」

「こんなになっちゃって……。お菓子に謝ってください！」

「おまえが謝れよ！」

その時、軽くノックの音が聞こえた。今度は本当に相談者だろう。

理奈先輩が立ち上がりドアに近づく。開いて会話した後、その生徒

を招き入れた。入ってきたのは私と同じ一年生の女の子だった。赤色のリボンで見分けがつく。どこか緊張した様子で促されたソファーにゆっくりと腰を下ろした。

「今お茶入れるわね」

そういうと理奈先輩はお茶を入れに行った。

「稲葉先輩、お客さんですよ」

「ふーん」

我が部では普段、部長が相談者の向かいに座り話を聞くことになっています。しかし、今日の先輩は魚臭くなったせいか、やる気がなさげです。

「ほら、早く動いてくださいよ」

「顔が濡れて力がでねーし」

どこのアンパンですか……。

困っていると、後ろから理奈先輩の声が聞こえた。

「稲葉がこんなだから、今日は秋菜ちゃんがやってみたらどう？ほら、同じ一年生同士の方が話しやすいと思うし」

「え？私ですか？？」

こういうことは初めてだった。いつも部長の稲葉先輩が相談を聞い

ていたし、いないときは先輩二人のどちらかが代わりをしていた。

「そうだな秋菜、やってみたらどうだ？」

ソファで腕を組んでいる健吾朗先輩も同意してきた。

えっと、どうしよう、何話せばいいのかな……って、そんな悩む前に……えーーい！やっちゃえ！！

「私、やってみます！」

先輩達を一瞥し、ソファーに座る。

「ちゃんとやれよー」

稲葉先輩が言う。

あなたが言いますか……。

向かい合った相談者の顔をみる。とても困惑した表情だった。

ちょっと待たせすぎちゃったかな。

「こんにちわ。えっと、取りあえずお名前教えてもらっていいかな？」

「あ、一年二組の藤咲くるみです」

「くるみちゃんかぁ、わたしは…」

「秋菜さん、ですよね……さっき聞いちゃいました」

そう言ってくるみちゃんは薄く笑った。どうやら緊張が解けてきたようでほっとした。

「うん、それじゃあどんなこと相談しに来たのか、教えてくれる？」

私がそう言うと、視線を下げて言った。

「はい……実は、この学校に一つ上のお兄ちゃんがいるんですけど、私の大切なものを返してくれないんです」

「大切なものって、なにかな？」

「……ナイフです」

うわっ、とりあえずお兄さんが正しいんじゃないでしょうか……。

難しい顔になった私を見て、くるみちゃんは手をぱたぱたさせて付け加えた。

「あのっ！ナイフって言ってもとても小さなものなんです。転校して行ってしまった友達が最後に私にプレゼントしてくれたもので、とても大事にしてるんです！」

お友達もややこしいものプレゼントしたなぁ……。

「そっかー……でもやっぱり学校に持ってくるのはまずいんじゃないかな」

「はい、それで家においておこうと思ったら、それでもだめだ、俺

が預かるっていうんです」

確かに危ないものですよね……。でもそこまで大事なものなんだったら……。

「分かった。私に任せて！きっと取り戻してあげる！」

言った途端に、くるみちゃんの顔がパーッっと明るくなった。

「ほんとですか！？ありがとうございます！！」

「うん、約束する！」

その後、お兄さんに関する情報を話してもらい、くるみちゃんは嬉しそうに帰って行った。

くるみちゃんが帰った後、私は先輩達に聞いてみた。

「それで、誰が会いに行きます？先輩達って同学年ですよね？」

「あれ？秋菜が行くんじゃねーの？」

稲葉先輩がさらりとそんなことを言う。

「そうね、さっき私が取り戻すって意気込んでたからてっきり」

理奈先輩も同意した。

「え！？私ですか！？？」

「つべこべ言わずに行って来い」

「がんばってね」

「期待してるぞ」

有無を言わせぬ三人の視線が突き刺さる。

先輩方……、励ましありがとうございます。

というわけで、私がナイフを取り返しに行くことになりました。

さて、無事に取り返せるものでしょうか……。

第3話　残念なお菓子と相談者（後書き）

分かっているかもしれませんが、この小説は完全に不定期更新です。
楽しみにしている方は首を長くして待っていて下さいね！

第4話　3話のつづき（仮）

次の日の昼休み、空腹の私は二年生のクラスがある三階の廊下を歩いていた。

ああ、お腹すきました……お腹がぎゅるぎゅる言ってます。なんかとてもデジャブを感じるのですが……。

しかも他学年の廊下って妙に緊張しますよね……。何で他の学年がこんなとこに？って目で見られるし……。

ただ、昼休みだけあって人通りは少なかった。私は一つの教室の前で止まり、プレートを見上げる。そこには二年七組と書かれていた。ここだ、と思い、そっと入り口から覗く。そこでは二年生達が各々で集まって座り、お弁当やらパンやらを食べていた。

うわっ、どうしよう……。すごい緊張してきました……。

すると近くにいた男子生徒が私に気づき、声を掛けてきた。

「あれ、君どうしたの？」

慌てて私は返答する。

「えっっ！……と、あのー！　…藤咲先輩っていますか？」

するとその男子生徒は何を思ったのか笑みを浮かべ、そうかぁなるほど、などと呟いた。そしてお弁当を食べている一つのグループを向いて、大声を上げた。

「藤咲ーーーー！！！一年の女子がおまえに話たいことあるってさーー！！！」

ちょ、ちょっと、今の発言は誤解を招くんじゃないでしょうか……。

予想通りクラスが一瞬静かになり、急にざわざわし出した。きゃ～～！とか黄色い声や、藤咲やる～！とか言う声が聞こえてくる。

ですよね……。こうなりますよね。

緊張で寿命ちぢみますって……。

すると呼ばれたグループの中の一人が立ち上がり、私の方へ歩いてきた。

百八十センチぐらいあるすらりとした背丈に線の細い顔立ちで、困ったように少し微笑んでいる表情が、なんともいえないかっこよさをかもし出していた。

一言で言うとイケメン。

あら、本気で狙ってみようかしら。

彼は私の傍まで来ると、優しい笑顔を作ってこう言った。

「僕に用かな？ハニー」

前言撤回。

光の速さで興味を無くした私は、一つ咳払いをして彼の顔を見上げた。

「あの、ちょっと話があるんです」

クラスが再びざわめく。

黙ってて下さい……先輩方。

「いやぁ、クラスに直接来るなんて君って大胆なんだね。でも強引な女の子もタイプだよ」

「お腹が空いてるので簡潔にいいます。藤咲先輩、くるみちゃんのナイフを返してください」

「君のハートを返してほしいって？それは難しいなぁ」

ダメですこの人っ。完全に飛んじゃってます！

「ナイフです！ナ・イ・フ！」

「え？ナイフって……」

先輩の笑顔が曇る。

よかった。ぶじ帰ってきてくれた。

そして彼は真剣な表情になり、さっきとは打って変わって重い口を開くように言った。目に力が篭っている。

「それは無理だ」

あまりのギャップに、少し気後れする。

が、それでも私は負けられないと意を固めた。くるみちゃんのため

にも。

「あれはくるみちゃんの大切なものなんです。お兄さんが預かる権利なんてないと思います」

「いや違うな、妹のことを思ってのことなんだ。君が誰だかは知らないが関係のないことだ」

お互いの視線が、稲妻でも走ったかのようにぶつかり合う。クラスが不穏な空気を察したのか、違うざわめきが生まれた。

しかししぶといですね。でもこの人ならうまく行くかもしれません。私は先輩だけに聞こえるように、囁いた。

「藤咲先輩って、理奈先輩に振られたんですよね……」

「……っ！」

藤咲先輩の表情が驚愕に変わった。なんで知ってるんだ、と言わんばかりの表情だった。

この情報はきっと役に立つからと、稲葉先輩が教えてくれたものでした。先輩にこんな優しさがあることに驚きでしたが。

「……そうか、君はあの部活の」

「ええそうです。もしそのナイフを返してくれるのなら、理奈先輩と仲良くできるお手伝いをしてもいいかな～って思ってるんですよ。どうです？」

私は満面の笑みで交渉を持ちかけた。対して藤咲先輩は、唇を噛み目が泳いでいる。これは……いける！

「いや、やめとくよ」

「へ？」

あっさり引き下がった先輩を見て、私は間抜けな声を出した。

「うん、そうだ、僕は過去にはこだわらない。理奈のことはきちんと諦めてるからね。僕はいつまでも引きずるような小さい器の男じゃないよ」

まじめな顔で言う。

何とも男らしい決意だけれど、いやいや、それじゃあ作戦もなにもあったものじゃない。

「待ってください！ほんとうにいいんですか……？」

「ああ、大丈夫さ。それよりも僕は君とお近づきになりたいな。見た目よりもなかなか知的なんだね」

ああ、恋愛の矛先がこっちに！

「いや、それはちょっとっ」

「もし今度デートしてくれたらナイフをくるみに返してもいいよ？」

満面の笑みで交渉を持ちかけてくる先輩。

うわっ、なんて卑怯なんでしょう！私も人のこと言えなかったけど！

たじろぐ私に「どうするの？」とじらしかけてくる。

くるみちゃんの喜ぶ顔が頭に浮かぶ。ありがとうございましたっ！

って言う嬉しそうな声が頭に響く。

そうだよね、一回ぐらいなら、デートですし……。

そんな決断を下そうとした瞬間だった。

別のグループの中から見知った顔の先輩が近づいてくる。

茶色い無造作に伸ばされた髪。

それは紛れも無く、我が部の部長、稲葉先輩だった。

ああ、稲葉先輩が白馬の王子様に見えますっ！

って、なんでここに！？

稲葉先輩は藤咲先輩の肩を叩いて言った。

「悪いな、うちの部員が邪魔したみたいで」

「稲葉か。別に構わないよ、むしろ光栄だ」

「それなんだけど無かったことにしてくれよ」

藤咲先輩の顔が歪む。

「残念だけれど、稲葉の頼みでもそれはちょっと無理だよ。愛し合う二人の邪魔は誰にも出来ないはずさ」

一方的な恋じゃないですかっ！

「そのことなんだが……」

稲葉先輩は一度私の方を見てウインクした。体に悪いです。そして再び藤咲先輩の方を見てこんなことを言ってのけた。

「こいつ、俺の彼女なんだ」

クラス中が沸き立つ。藤咲先輩も驚いている。

「初耳だ……」

初耳です！

「そういうわけだ。ちなみに、……ちょっと耳かせ」

「あ、ああ、男に顔を近づかせるのは趣味じゃないが、少しなら」

稲葉先輩は藤咲先輩の耳元で囁いた。なんて言ったかはよく分からなかったけど、ナイフ返さなければあのことばらす？かな。

藤咲先輩は表情を一変させると、ナイフを渡して泣きそうになりながら去っていった。

あのことってなんでしょう……。

こうして今回の相談は解決したわけですが……。

いろいろと問題点があります！

「秋菜、大丈夫だったか？」

「大丈夫ですけど、なんで先輩がここにいるんですか！？」

私は当然の疑問を口にした。

「なんでって、そりゃここ俺のクラスだし。知らなかったのか？」

当然のように稲葉先輩が答える。

「知りませんよ。教えてくれなかったじゃないですか。それにだったら、先輩が頼めばすんだ話じゃないですか～！」

「部員たるもの経験が必要だしな。それにしても面白かったぜ？もうちょい見ていたかったな、うん、失敗した。止めなければよかった！」

沈めたい、ああ沈めたい、沈めたい。

「それに始めからあのことを教えてくれればよかったじゃないですか」

「それはダメだ。藤咲の名誉に関わる事だからな」

しかもクラス中が私達の方を見てニヤついてる！？

「とりあえず誤解を解いてくださいよ！」

これじゃあ二年生の廊下歩けません！もう二度と来ませんけど！

「おっと、もうすぐ予鈴だぞ。じゃあな！」

そう言って私を廊下へ追い出すと扉を閉めた。教室内はいぜん慌しい。私が再び開けようとすると、聞きなれたチャイムの音が鳴った。

まあ、とりあえず。
今日も昼食抜きになりましたとさ。
めでた……くない。

うう、早弁してやる。いや遅弁か。次の英語の時間に食べてやる！
教科書の陰で食べてやる。
フフッ、フフフフッ……。

私はへらへらと笑いながら自分の教室へ足を進ませた。

第４話　３話のつづき（仮）（後書き）

久しぶりの更新でした。

第5話　今日は何の日？

パシリの日。

前回の依頼から二週間後、今日は久々に依頼人が来るということで、部室には４人全員が集まっていた。
ソファに行儀悪く座っていた稲葉先輩が、ぽつりとつぶやいた。

「秋菜、パン買ってこい」

突然何を言い出すんでしょうか、この人は。

「俺は腹がへった。部長命令だ。今からお前を食料調達班に任命する！」

いわゆるパシリ班ですね。

そう言って稲葉先輩は、釣りはいらんと言って１０円玉を渡してきた。私は無言でそれを受け取る。

これはもう明らかですね。いじめですね。

「理奈先輩〜〜〜〜！！」

私はソファに行儀良く座って本を読んでいる理奈先輩にすがった。
しかし、そんな理奈先輩の口からは思っても無い返事が返ってきた。

「あら、私もいいのかしら。じゃあメロンパンをお願い」
そういってにっこりと微笑んだ。ああ、その笑顔が眩しいです……。
「健吾先輩〜〜〜〜〜！！」
飛びつくように駆け寄ったが、先輩は眉一つ動かさずに、
「俺はカツサンドだ。これだけは譲れん」
と、断言した。
いやいや、譲る以前の問題が発生しているんですが……。
そして私は再び稲葉先輩を見た。先輩はいつの間にか立ち上がっていて、腰に両手を当てていた。
優越感にひたったような、満足げな顔がそこにあった。
「残念だったな」
「っ〜〜〜〜〜〜〜！！」
私は声にならない叫びを発し、泣く泣く教室を飛び出した。
十円玉を握り締め、ろうかをつっぱしった。
そして誓った。
必ず、復讐してやると！

―――パン購入後。

見てろよ先輩共！私だけ百円高いパンを買ってやりましたよ！

私が食べているパンを見て、よだれを垂らしながら拳を握り締め、悔しがる先輩方の顔が浮かびます……

フフフフッ……

……はぁ

そんなことを考えながら、私は部室の前まで来た。中からは物音一つ聞こえなかった。

まさか帰っていないですよね？

泣きそうなほどの不安が渦巻く胸を落ち着けながら、私はゆっくりと扉を開けた。

と。

同時に。

「「お誕生日おめでとう～～～～！」」

いっせいにクラッカーの音がパーーーンッと鳴り響いた。色とりどりのテープが私に降りかかる。

私はあっけにとられて固まってしまった。

室内には至るところに折り紙で作ったリングが飾ってあって、先輩三人が私にクラッカーを向けて笑っていた。

そしてテーブルの真ん中には大きなケーキが置かれていた。

もしかして。これは私のために？

「ほら、秋菜ちゃん、こっちに来て」

私は理奈先輩に連れられてケーキの前に立たされた。
そのケーキにはろうそくが立ってきて、中央に置かれたチョコには
ｈａｐｐｙ　ｂａｒｔｈｄａｙ　Ａｋｉｎａ　と書かれている。
思わず目頭が熱くなってしまった。

「……ありがとう、ございます」
私は呟いた。
それからお馴染みの歌を歌ってもらい、プレゼントをもらい、みんなでケーキを食べた。今日依頼人が来ることも嘘だったらしい。

それでも、今日はとても楽しくて思い出に残る日になった。

今日は何の日かって？

私の誕生日ですよ♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2774f/

私の青春の１ページは。

2010年12月1日06時15分発行